

が豊かであれば、それはその人自身や学校・学級の端々に表れるし、またその逆も言えるのだとこの授業で学ぶことができた。）

- 道徳の教育はあらゆることを対象とする。また、社会環境の変容を受け、その教授内容にも日々工夫が必要である。
- 教員になるに当たってモラルに関するテストはないから、教員がモラルに欠けていることも有り得る。教員への道徳教育を実施し、道徳教育への意識を共有することが必要である。
- 自身の経験から、道徳は一方通行的なものではなく、他者との話し合いなどを取り入れた双方向的なものになるよう教員は努めるべきである。
- 道徳教育の確たるものを学べるのは、道徳の授業の時間だけではない。他教科や、学校行事でも正しい道徳観を身に付けることができる。したがって、クラスの生徒に、近隣の自然に触れる機会を設けるなど、現代の生徒に欠けている様々な経験を与える時間にすることも含め、有意義に使う。道徳の時間を自習やテスト対策の時間に転用する例を多く聞くが、許してはいけない。
- 教科書・心のノート等も効果的な教材だが、教授内容を義務的に設定したり、考える時間を設けないようなゆとりのない時間にするのは、道徳の授業に適さない。生徒が、自身がどう思うかを確立できるようなゆとりが必要だ。

課題として残ること： 道徳とはあらゆる人間の生活に通ずる価値観、概念であるとしたら、近年のスマートフォンへの依存や盲目的な信頼を断ち切れるのもまた、道徳教育であってほしい。今、沈黙考するゆとりとか、電子機器との正しい付き合い方が身に付いていない者が多い。自分の代わりにスマートフォンを使って子をあやす親の登場（読売新聞 2013.11.16）で乳幼児の時期から心の交流を失っている事実からして、親への道徳教育（再教育）も必要になっている可能性が高い。（※下線：筆者）

ここには、道徳授業をもっと有意義に使い、社会環境の悪弊に立ち向かえる積極的でゆとりある学びの場とすべきである、との主張がある。

IV 道徳授業の改善の方向

1 停滞する道徳教育を打開する3つの再編成の方法

現在、「報告」を始め、諸々の道徳教育改善の議論を総合すると、停滞する道徳授業を打開する方策として、次の3つの手立てが考えられる。

- ①現在の心理主義的な道徳を見直して再編成すること
- ②社会的なシチズンシップ教育を取り入れた道徳に再編成すること
- ③哲学を基盤とした統合的な学びを取り入れた道徳に再編成すること

今般の「教科化」は、3つのどれに対しても考慮した新たな道徳教育・授業を企図しているが、やはり①を主としながら、②や③を合わせて実現していくことになるだろう。次章で論ずる「体験的・実感的ストーリー」は①の考え方をより深めるための一提案である。

ところで、②や③は方法的な捉え方が強くなって先事例等が求められる、やがて形式化していく学校のお決まりの対処法が危惧される。過去、問題解決学習や総合的な学習の時間への対応がそうであった。そうしないためにも、道徳教育・授業の改善は哲学的に深めていくことと社会の方向へ広げていくことを、二者択一ではなく、その相補性を追求すべきである。

まず哲学は価値と自分を関係付ける営みと指摘される。(河野, 2011)

道徳的問題に関して哲学的に議論することは、自分にとっての道徳的価値を確認し、道徳的な事柄と自分とを関係付ける作業である。現在の日本の教育の最大の問題は、学習者の観点から知と技術が意味付けられていない点にある。本人にとっての意味を問わずに知と技術が画一的に教え込まれるならば、生徒はアノミー状態となるであろう。
(※下線：筆者)

他方、社会への方向に広げることでは、道徳教育を規範教育から市民教育へと転換を図るべきであるとの指摘がある。(松下, 2014)

規範教育は、個人道徳として身に付けるべき固定した規範やルール・決まりに基礎を置き、各人の自由な利益追求を抑え込むことを求める。ここでは「公」と「私」は対立する関係にある。

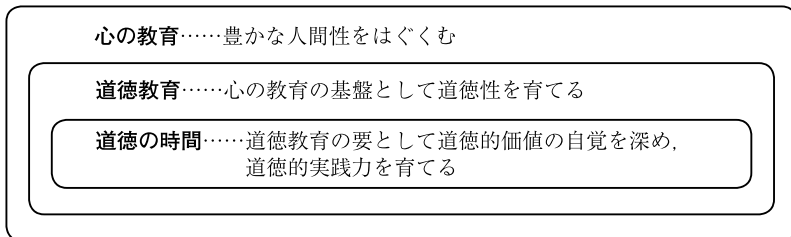
市民教育は、日常生活や共同体実践を通じて身に付ける共同体道徳に基礎を置き、より良き社会を求めて多様な人々が交流しコミュニケーションと協働を展開する。ここでは「公」と「私」は支え合う関係にある。

今般の道徳の教科化のねらいは、道徳教育に市民教育の考えを取り入れようとする時代の要請を受けたものと考えられることができる。

2 道徳の時間・道徳教育・心の教育の関係への疑問

中学校学習指導要領・総則には、「学校における道徳教育は、道徳の時間を要（かなめ）として学校の教育活動全体を通じて行うもの」と述べられ、さらに一般的には次図のような入れ子構造で、「心の教育」を支えていると理解されてきた。しかし、ここで注意を要するのは、「心の教育」を最も外側に配置しているが、この場合の「心」は単に人の内面・心理面のみを指すのではなく、行動面・社会面への広がりをもつものと解釈しないとこの入れ子構造は成立しないことになる。

図1 心の教育、道徳教育と道徳の時間の関係 [東京学芸大学「総合的道徳教育プログラム」]



この度の「道徳教科化」論議の契機となったいじめ問題への対処や、2004（平成16）年及び2014（平成26）年の佐世保市の殺人事件等への善後策として「心の教育」が唱えられる。しかし、筆者は以前からこの「心の教育」の考え方にはムリがあり、「心の教育」よりも「人間教育」の方が妥当であると考えてきた。今般の「報告」にも次のような記述がある。

今後の社会において、道徳教育に期待される役割はきわめて大きく、道徳教育は人間教育の普遍的で中核的な構成要素であると同時に、その充実は、我が国の教育の現状を改善し、今後の時代を生き抜く力を一人一人に育成する上での緊急課題である。
(※太字・下線：筆者)

「心の教育」は、どうしても「心理主義」の個人発想を想起して好ましくない。「心理主義とは、価値や真理などの抽象的概念を個人の心理的作用として把握しようとする学問上の態度である（吉田，2013）」

3 道徳教育・授業のこれまでの固定的な考えや指導の打破を

永田繁雄氏は、道徳授業の点検項目を「生活習慣病—いつもの道徳授業はどうだろうか？」と次のように4つ挙げている。（永田，2014）

- a 人物の気持ちを順次問う授業展開のみになっている。（心情の時系列）
- b 教師の発問と子どもの反応の往復のみになっている。（ピンポン型）
- c 教師の資料解釈に基づく方向に安全に誘導している。（安全運転重視）
- d 1つの指導過程を「基本形」として常に守っている。（フレーム思考）

これらの習慣病は、授業者が道徳の指導に意義を見出し、熱心に工夫しながら取り組むところには発生しない。このような形式化し、パターン化し、思考停止の状態になっている道徳授業は打破しなければならない。

これは「道徳的な行動」と称する行動にも言えることである。例えば、朝の遅刻は、単なる寝坊での遅刻だけでなく、通学途上で病気の人への面倒をみたための遅刻もあり、一番末の妹の保育所送りを手伝ったがための遅刻もあり得る。同じ遅刻でもいろいろな背景や理由があり、ジレンマ状態の場面もある。それらを適切に判断するのが道徳的判断力である。このように「道徳的な行動」には、ときに逆説的な意味を含む可能性があることを広い視野で捉えながら、人の生活や物事に対処していく必要がある。

4 道徳教育・授業の新たな方法的アプローチ

今回の「報告」における大きな特徴は、指導方法・学習活動の工夫に多くの点で言及していることである。その1つが、とかく批判される**伝統的な方法**である、道徳的価値を伝達し内面化するアプローチであり、道徳教育の王道としての読み物資料の登場人物等に感情移入させる指導である。しかしながら、「心のノート」を全面改訂した「私たちの道徳」は、資料数を増やし、その扱い方も充実を図っている。例えば、メッセージやコラムのページ、ワーク形式のページ、家庭で大人と一緒に読める機能等、来た時代の道徳検定教科書を想定した内容となっている。

他方、「私たちの道徳」は、**新たな指導方法・学習活動**にも配慮がなされている。特に、「報告」でも指摘されているように、①言語活動の充実（表現活動＝書いたり討論したり）と、②具体的な動作や問題解決的な指導（動的な活動＝ロールプレイ、問題解決的な学習）がある。例えば、「思いやり」をかけることが逆効果になる場合があることを考えるページや短文・詩・言葉・グラフ等の多様な素材を基にして考えるページ等がある。①に関しては、「この本の使い方」の欄にも「『読み物』を読んで、友達と話し合ったりしてみよう」と話し合いを強調している。

下村 晶氏は、新たな道徳の方法に次のものを挙げる。（下村，2014）

- ①モラルジレンマ授業
- ②価値明確化（シティズンシップ教育との関連）
- ③モラル・スキル・トレーニング（内なる道徳性涵養よりも行動重視）
- ④構成的グループ・エンカウンター
- ⑤哲学教育（批判的・創造的・ケア的思考、『山びこ学校』、共同体の形成）

この中で「⑤**哲学教育**」は、道徳授業が根本のところでは哲学的考察を行うこと、さらには個人道徳よりも共同体道徳が志向されている。

また、「①**モラルジレンマ授業**」は、ジレンマ場面で悩みながら生活す